

「モチモチの木」

内容とあらすじ・ポイントを解説

「モチモチの木」あらすじ

「モチモチの木」のあらすじ・作者（さくしゃ）・登場（とうじょう）人物（じんぶつ）をかくにんしよう。

作者について

「モチモチの木」は、さいとう りゅうすけさんが書いた絵本だよ。さいとう りゅうすけさんは、ほかにも「花さき山」「半日村」などの絵本をかいているよ。

登場人物（とうじょうじんぶつ）

【豆太（まめた）】

このお話の主人公の五才の男の子。夜中に一人でせっちゃん（トイレ）に行くのをこわがっているよ。

【じさま】

豆太といっしょにくらしているおじいさん。じさまとたった二人でくらしている豆太がかわいそうで、かわいがっているよ。

【医者様】

山のふもとの村に住んでいる、お医者さん。じさまのおなかがいたくなったときに、豆太がよびに行くと、じさまのところへ来てくれたよ。



あらすじ

五さいの豆太は「おくびょう」で 夜中に一人で せっちんに行けません。

せっちんは 外にあるのですが、外にある大きな「モチモチの木」が おばけみたいにおどかしてくる気がして、こわいのです。

いっしょにくらしているじさまは、そんな豆太を かわいがっています。

あるばん、じさまは 「モチモチの木」に 灯（ひ）がともることを 教えてくれました。

それは 山の神様のお祭りで、勇気のある子どもにしか 見る事ができないというのです。

「ゆう気のない自分には見る事ができない」とあきらめてねむる 豆太でしたが、その真夜中、じさまは おなかが いたくなってしまうます。

豆太は しものおりる 寒くてこわい夜の道を、一人で 医者様を よびにいきます。

医者様に おぶられながら じさまの小屋へ 帰ってきたとき、豆太は 見たのです。そう、「モチモチの木」に 灯がついているのを。元気になったじさまは 「おまえは 一人で 夜道を 医者様よびにいけるほど 勇気のある 子どもだったんだからな。人間、やさしささえあれば、やらなきゃならねえことは、きっとやるもんだ」と 話してくれました。



「モチモチの木」内容とポイント

「モチモチの木」の場面分けごとに、内容（ないよう）とポイントを かくにんしよう。

登場人物の セリフや行動から、「登場人物がどんな人か」「その場面では、どんな気持ちだったか」も 考えてみよう。

だい1の場面 おくびょう豆太

だい1の 場面では、豆太やじさまが どんな人か、書いてあるよ。少しずつ かくにんしよう。

豆太は夜中に一人でせっちんに行くのがこわい

豆太は、夜中に一人でせっちん（トイレ）に行けないよね。
なぜかというと せっちんは外にあって、外に生えている「モチモチの木」がこわいからだよね。

このお話は 1971年に書かれたお話だけれど、昔は 外に トイレがある家が 多かったんだよ。

なぜ「モチモチの木」が こわいかというと、『空いっぱいのかみの毛をバサバサとふるって、両手を「ワァッ！」と あげるから』だね。

かみの毛 は、きっと 木のえだのことだね。

たくさんの えだが、 いろいろな ほうこうに のびていて、豆太には、もじゃもじゃした かみの毛 みたいに 見たんだね。



バサバサ という言葉から、えだが 風にゆれて、動いたり、大きな音を立てたりしていることが 分かるね。

両手をあげる というのは、木が まるで両手を広げるように、えだを広げている様子を 表しているんじゃないかな。

おばけが 「うらめしや～」と 手をぶらぶらさせている イメージかな。

豆太は 「モチモチの木」が おばけみたいに おどかしているように 思ったんだね。だから、豆太は 夜中に一人で せっちんに行けないんだね。

せっちんに行くとき、豆太は 「じさまぁ。」と よぶよね。

「じさまぁ」というよび方から、豆太の 心細い気持ちが 伝わってくるね。このように、勇気がなくて、気持ちが小さいところがあるから、豆太は 「おくびょう」なせいかくを しているね。

じさまは 豆太のせっちんに ついてきてくれる

じさまは 豆太によばれると、すぐに 目をさましてくれるよね。

ねむっているときに 起こされたら、「ねむいな」「めんどうだ」という気持ちに なりそうだけど、すぐに 目をさましてくれるから、じさまは やさしいね。

「とうげのりょうし小屋」と書いてあるから、じさまは 山おくで りょうしをしているんだね。

豆太のおとうは 死んでいて、山おくで じさまと 二人きりだから、豆太は じさましか たよる人がいないのかもしれないね。



だから、じさまは 豆太を「かわいそうでかわいい」と思っているんだね。

お話といっしょに 書かれている絵を見ると、 じさまが 豆太を だきしめて、豆太も じさまに しがみついているよね。

じさまは 豆太を 大事に思っていて、豆太も じさまを たよりにしている感じが するね。

豆太を「おくびょう」と言っているのはだれだろう？

お話を読むと、「 」の会話文ではない文も、「ぬらされちまうよりいいからなあ」や「こんなにおくびょうなんだろうか——」など、 だれかが私たちに 話しかけているみたいだよ。

だれが 話しているのかな？

主人公は 豆太だけれど、「全く、豆太ほどおくびょうなやつはいない」と、豆太が自分でいうのは へんだよね。

じゃあ、じさまかな？

でも、じさまは 豆太を「かわいそうでかわいい」と 思っているのに「こんなにおくびょうなんだろうか——」なんて、言わないと思うな。

登場人物の 言葉や様子を 私たちに 話すように教えてくれる人を 「語り手」というよ。「語り手」は 登場人物ではないけれど、お話の世界に入っていて、豆太やじさまとは 少しはなれたところにいるよ。

豆太のことを 「おくびょう」と言っているのは、「語り手」だったんだね。

「語り手」は おとうのことを「きもすけ」と言っているよね。

じさまのことは 「きもをひやすような岩から岩へのとびうつりだって、みごとにやってのける」と 言っているね。

「語り手」は おとうやじさまの 勇気があるところを ほめているよね。



だから、ゆう気のある 豆太の おとうやじさまと くらべて、どうして豆太は 勇気がないのだろう？と 思っているんだね。

だい2の場面 やい木い

だい2の 場面では、昼間の「モチモチの木」に 対する 豆太の気持ちと、夜の「モチモチの木」に 対する 豆太の気持ちが 書いてあるよ。それぞれ かくにんしよう。

昼間は 「モチモチの木」 にいばっている

昼間の 「モチモチの木」は、秋になると もちにすると ほっぺたが 落ちこちるほどうまい、茶色いぴかぴか光った実を いっぱいふり落としてくれるよね。

夜の おばけみたいなすがた とはちがって、しぜんの めぐみを くれる やさしい木だね。

だから、豆太は 「モチモチの木」という 名前を つけたんだね。

もし こわいだけの木だったら 「おばけの木」という名前をつけるか、名前なんて つけなかったかもしれないよね。

でも、「モチモチの木」という 名前をつけたから、豆太は「モチモチの木」を 身近に感じていたり、実をくれるいい木だと思ったり している感じがするね。

豆太は、昼間の「モチモチの木」に「やい木い、モチモチの木い！実い落とせえ！」と言ったり、かた足で あしぶみしたり しているよね。



元気があって、少しわがままで いばっている感じがするね。

ということは、昼間は「モチモチの木」が ちっともこわくないんだね。

夜は 「モチモチの木」がこわい

夜になると、「モチモチの木」を見ただけで、豆太は しょんべんが 出なくなってしまうよね。

なぜかという、 「モチモチの木」が おばけみたいに おどかしてくるよ
うに 思うからだね。

どれだけ こわがっているかという、じさまが ひざにかかえて 星やし
か、くまの話 をしてから「シイーッ」と 言ってくれないと、しょんべん
が 出ないほどだよね。

じさまは 豆太が「モチモチの木」のことを 考えないように、他の話を
してくれているのかも しれないね。

豆太とじさまは だい1の場面でも かくにんしたとおり、山おくでくらし
ているから、きっと 電柱（ちゅう）や まちの明かりがなくて、星や月の
わずかな明かりがあるだけで、外は 真っ暗だよね。

だから、昼間と同じ「モチモチの木」だけれど、暗い夜は 大きくて えだ
を広げている「モチモチの木」の形が おばけに見えて こわいんだね。



だい2の場面の語り手

だい2の場面でも、「モチモチの木ってのはな、豆太がつけた名前だ」など、「語り手」が私たちに話しかけるようにお話の様子を教えてくれているね。

「語り手」は、豆太のことを『五つになっても「シー」なんて、みっともないやなあ』と 思っているね。

だい3の場面 霜月(しもつき)二十日(はつか)のばん

だい3の 場面では、豆太は じさまから、霜月二十日のばんに 「モチモチの木」に 灯ひがともることを 教えてもらうよ。

じさまが「モチモチの木」に灯がともると教えてくれる

じさまは 豆太に、霜月二十日のばんに 「モチモチの木」に 灯がともるから、起きてて見てみる と言ったね。

それは 山の神様のお祭りで、勇気のある 一人の子どもにしか 見ることができないんだよね。

豆太は 「……それじゃあおらは、とってもだめだ……。」と ちっちゃい声で なきそうに 言ったね。「とってもだめだ」というのは、「ぜったいできない」ということだね。

なぜかというと 「じさまも、おとうも見たんなら自分も見たかった」けれど、真夜中に 「モチモチの木」を 一人で 見に行くなんて、「とんでもねえ話だ。ぶるぶるだ」 だからだね。



「とんでもねえ」とは、「おそろしくて、ぜったいにできない」ということじゃないかな。

なぜ「とんでもねえ」と思っているかということ、だい1、だい2の場面がかくにんしたとおり、豆太は夜の「モチモチの木」がおばけみたいでこわいから、一人で外に行けないからだね。

「ぶるぶるだ」という言葉から、考えるだけでふるえている様子が分かるね。

だから、「自分には見るができない」と悲しくてなきそうになったんだね。

それから、豆太は「——昼間、だったら、見てえなあ……」とそっと思うよね。

なぜかという、昼間なら「モチモチの木」がこわくないからだね。

だから、「もし昼間だったら見に行けるのになあ」と心の中で思ったんだね。

「見てえなあ……」の「……」から、豆太が本当は「モチモチの木」の灯を見たいと思っていることが伝わってくるね。豆太はふとんにもぐってたばこくさいじさまのむねの中に鼻をおしつけてねてしまうよね。

悲しい気持ちやくやしい気持ちのときは、何も考えたくないし何もしたくなくなるよね。

豆太も自分がおくびょうなことが悲しくてくやしかったから、何もしたくなくてふとんにもぐったんだね。



たばこくさいにおいというのは、豆太にとっては 大好きなじさまの においだよね。だから、大好きなじさまの においをかいて 少しでも 悲しい気持ちを まぎらわせたかったのかも しれないね。

だい3の場面の語り手

だい3の場面でも、「今夜は灯がともるばんなんだそうだ」など、語り手が 私たちに話しかけるように、お話の様子を 教えてくれているね。

「だって、じさまも、おとうも見たんなら、自分も見たかったけど、こんな冬の真夜中にモチモチの木を、それもたった一人で見に出るだなんて、とんでもねえ話だ。ぶるぶるだ。」と言っているのも、語り手なのかな？

会話文の「 」はついていないけれど、「自分も」と言っているから、これは 豆太の気持ちだと 思うな。

いいところに気がついたね。

「語り手」は 登場人物の内面に入りこんで まるで「語り手」が そのまま感じているかのように、登場人物の 気持ちを 教えてくれることも あるんだよ。

だい4の場面 豆太は見た

だい4の 場面では、豆太は おなかがいたくなった じさまのために、夜中に 一人で 医者様を よびに行くよ。

少しずつ かくにんしよう。



じさまは おなかがいたくなる

豆太は くまのうなり声が 聞こえたから、目をさまして 「じさまあ
っ！」と しがみつこうとしたね。

せっちんに行くのが こわいときも いつも じさまに あまえていたか
ら、このときも まず じさまを たよろうと したんだね。

でも、くまのように うなっていたのは、じさま だったね。

なぜうなっていたかという、 じさまは おなかが いたかったからだ
ね。

豆太は「じさまっ！」と言って、じさまに とびついたよね。なぜかとい
うと、「こわくて、びっくりした」からだね。

豆太は医者様をよびに行く

じさまが ますます うなる様子を見て、豆太は「医者様をよばなくっち
ゃ！」と、戸を 体でふっとばして、ねまきのまま、はだして 走り出した
ね。

どうして 豆太は 戸を 手であけないで 体で ふっとばしたり、霜月だ
から 外は 寒いはずなのに はだして 走り出したのかな？

それに、豆太は 夜の「モチモチの木」がこわいから、いつもの豆太なら
「一人で外に行くなんてできないよ」と 思いそうだよね。

このときの 豆太の行動は とてもいきおいがあって 急（いそ）いでいる
よね。



きっと このときの豆太は とにかく「じさまを助けなきゃ！」 という気持ちで いっぱいだっただね。

だから 医者様を よぶことだけを 考えていて、急（いそ）いで 出かけたんだね。

豆太は なきながら 走ったよね。なぜかという、しもが足にかみついて足から血が出て、「いたくて 寒くて こわかった」からだね。

でも、あきらめずに なきながら 医者様のところへ 走ったよね。なぜかという、「自分がいたくて寒くてこわい」ことよりも、「だいすきなじさまが 死んでしまう」ことの方が もっとこわかったからだよね。

医者様は 豆太をおんぶしながら、じさまの小屋へ 来てくれたね。

豆太は 医者様のこしを 足で ドンドン けとばしたね。

なぜかという、「じさまが 死んでしまいそうな気がした」からだね。豆太は 「大好きなじさまが死んでしまう」ことが 一番こわいから、「こわいよ！」「早く助けて！」「なんとかして！」という 気持ちで 医者様のことを けとばしたんじゃないかな。

豆太は「モチモチの木」の灯を見る
じさまの小屋へ入るとき、「豆太は もうひとつふしぎなものを見た」と書いてあるね。

ふしぎなもの とは 「モチモチの木」に灯がついていたこと だね。

「もう一つふしぎなこと」と書いてあるけれど、一つ目のふしぎなことは何だろう？



それは 「月が出てるのに、雪がふり始めた」 ことだね。雨や雪が ふるときは 空に 雲がかかって 月が見えないことが 多いけれど、この日は 月が出ているのに 雪が ふり始めたから それも ふしぎなこと だったんだね。

だい3の場面では 「勇気のある子どもにしか見れない」と言われて「……それじゃあおらは、とつてもだめだ……。 」と あきらめていたのに、どうして豆太は 「モチモチの木」の灯を 見ることに できたのかな？

豆太が じさまのために 夜中に一人で 医者様を よびに行ったことは、とても勇気のいることだよ。

だから、豆太は 「モチモチの木」の灯を 見ることに できたんだね。

お話といっしょに 書かれている絵を 見ると、灯がともった「モチモチの木」は とてもきれいで かがやいている感じがするね。

まるで 「モチモチの木」が 勇気を出した 豆太のことを 「すばらしい！」と 言ってくれている みたいだよ。

だい4の場面の語り手

だい4の場面でも、「じさまが、なんだか、死んじまいそうな気がしたからな」など、「語り手」が 私たちに 話しかけるように、お話の様子を 教えてくれているね。

この場面では 「語り手」は 豆太のことを「おくびょう」とは 思っていないみたいだね。

豆太が 医者様を よびに行くところでは、短い文を たくさん使って 様子を教えてくれているね。



その場面の きんちょうする感じや 豆太が いっしょうけん命 走っている感じが 伝わってくるね。

だい5の場面 弱虫でもやさしけりゃ

だい5の 場面では、じさまが 夜中に一人で 医者様を よびに行った 豆太の勇気を ほめるよ。

じさまが豆太の勇気をほめる

元気になった じさまは、 豆太に「おまえは、山の神様の祭りを見たんだ。」「おまえは一人で夜道を医者様よびに行けるほど勇気のある子どもだったんだからな。」と話すよね。

なぜかという、夜に 一人でせっちんに行くのを こわがっていたのに、じさまのために 一人で 医者様をよびに行ったから、豆太は おくびょうなだけではなく、勇気を出せる心も 持っていたからだね。

じさまは、豆太が 勇気ある行動をしたことを よろこんでいる感じが するね。

じさまは、「人間、やさしささえあれば、やらなきゃならねえことは、きつとやるもんだ。」とも 話しているね。

「やさしさ」と「やらなきゃならねえこと」とは、何だろう？

このお話の中では 「やさしさ」は 「じさまのために 勇気を出して 行動した、豆太のやさしい気持ち」のことだね。



「やらなきゃならねえこと」は、「一人で医者様をよびに行く」ということだね。だから、じさまは「やさしさがあれば、だれかがこまっているときに 勇気を出して 行動することが できるよ。じさまの大事な 豆太は、そんなやさしさを 持っている すてきな子だよ」と 豆太に 伝えたかったんじゃないかな。

豆太は しょんべんに じさまを起こす

このお話の最後は、『それでも豆太は、じさまが元気になると、そのばんから、「じさまあ。」としょんべんにじさまを起こしたとき。』という文で終わっているね。

だい4の場面で、夜に 一人で 医者様をよびに行けるほどの 勇気のある子どもだったのに、どうして 豆太は また 一人で せっちんに 行けなくなったのかな？

一つは、じさまが 元気になって これまでどおりに やさしいじさまに あまえられることが うれしくて、安心しているのかも しれないね。

もう一つは、いざというときに 医者様を 一人でよびに行く やさしさを 持っていたけれど、夜の「モチモチの木」がこわい という気持ちは そんなに かわっていないのかもしれないね。

みんなも、豆太が 一人でせっちんに行けないように、できないことや 苦手なことがあるよね。反対に、豆太が 一人で 医者様をよびに行ったように 人にやさしくできるとか いざいうときに 勇気を出せることもあるよね。

豆太のように、弱虫なところがあっても いいよね。



その人らしいことだし、人それぞれ せいかくや とくいなこと、苦手なことも ちがうから、おかしいことではないよね。

弱虫なところや 苦手なことが あっても 心の中に やさしい気持ちを持っていれば、いざというときに 人のために 勇気を出して 行動できるんだ。

そんなやさしい気持ちが、とても大事なこと なんだよ。

このお話では、そんなことを 作者は みんなに 伝えたかったんじゃないかな。

だい5の場面の語り手

だい5の場面は、ほとんどが じさまの セリフだね。最後は「語り手」が「じさまを起こしたとさ」と言って、お話が終わったことを 教えてくれているね。



ことばの いみ

「モチモチの木」に 出てくる ことばの いみを しょうかいするよ。

※「モチモチの木」の お話の中で つかわれている いみなので ちゅういしてね。

ことば	いみと 本文での つかいかた
せっちん	トイレのこと。 もとは「せついん」という ことばだよ。 本文:せっちんぐらいに行けたっていい。
とうげ	山をのぼりつめて、そこから くだりに なるばしよ。 いちばん てっぺんの ところだね。 本文:とうげのりょうし小屋
組みうち	おたがいに 組みあって あらそうこと。 とっ組みあい。 本文:くまと組うちして、
きもすけ	ゆうきの ある人の こと。 本文:ぶっさかれて死んだほどのきもすけだった
青じし	かもしかのこと。
きもをひやす	おどろいて、ひやりとすること。 本文:きもをひやすような岩から岩へのとびうつり
こねあげて	こねあげるとは、よくこねて つくこと。 本文:もちにこねあげて
ふかして	ふかすとは、おゆの じょうき(ゆげ)で ねつをあたえる りょうりの ほうほう 本文:ふかして食べると
ほっぺたがおちる	食べたものが とても おいしいことを あらわす ことば 本文:ほっぺたが落ちこちるほどうまいんだ
さいそく	はやくするように ようきゆうすること。 本文:いばってさいそくしたりする
とこの中	ねどこの中のこと。ねているところの中。 本文:とこの中がこう水になっちまう



ことば	いみと 本文での つかいかた
みっともない	みぐるしいこと。 本文:みっともないやなあ。
霜月	11 がつのこと。「しも」がおりころなので、「しもつき」と言うよ。 本文:霜月二十日のうしみつにゃあ」
うしみつ	まよなかのこと。 本文:霜月二十日のうしみつにゃあ
灯がともる	あかりが つくこと。 本文:モチモチの木に灯がともる
よいの口	たいようがしずんでから、まだすぐのころ。 本文:よいの口からねてしまった。
うなり声	ひくくて長くつづく音。力を入れたり、くるしいときに出る。 本文:くまのうなり声が聞こえた
まくらもと	ねている人の「まくら」のそばのこと。 本文:まくらもとで、くまみたいに
歯を食いしばる	歯をがっちりとかみ合わせて、力を入れること。 本文:歯を食いしばって、ますますすごくなる ※じさまは、おなかがいたくて、歯を食いしばってがんばってたえていたんだね。
半道	やく2キロメートルの きより。 本文:半道もあるふもとの村
ふもと	山の下の方のこと。 本文:半道もあるふもとの村
わけを聞く	どうして来たのか、なにがあったのかを聞く。 本文:豆太からわけを聞くと
ねんねこぼんてん	赤ちゃんをおんぶするときにはおる うわぎ。 本文:ねんねこぼんてんに薬箱と豆太をおぶうと
かまど	土や石でかこって、火をたいて、そこで料理をすることができるところ。 本文:かまどにまきをくべたり、
まきをくべたり	まきをくべるとは、まきを 火の中に入れて、もやすこと

